

## よき人に出会って

藤 本 愛 吉

今年で三年目、みなさんとお会いすることができました。毎年来るたびに言っているんですけど、今、六十五になんなんとしてますけど、六十の時に右半身が脳出血で麻痺しましてから、五歳です。ですから満五歳ですね。五歳というのはいきいきしてます。六十五だけじゃなくて、今、五歳と思ってます。どうぞよろしく。

### 本当のことを大事にしていける人間に

今、あそこに置きましたのは、奈良の中宮寺の弥勒菩薩の彫刻でかかれたものですが、金子大栄っていう先生の『人間について』の本の表紙にありました。私はいろんな弥勒像を見てますけども、この彫刻の弥勒菩薩の顔が一番好きで、これを大きくしてうちの門徒

さんにも見てもらっています。ヤスパースという哲学者が、この奈良の中宮寺の弥勒菩薩を見て、「これが人間の考える顔だ」と言われたそうです。また「ロダンの考える顔は苦しい顔だ」と言うようなことを言われていたことを、どこかの本で読んだことがあります。みなさんも一回またロダンの考える顔とこの顔とくらべてみてください。私はヤスパースさんがどんな人かまだよく分かりません。何冊か本を読んだだけですけど、この言葉を知って、そうだなあと思いました。

それで今日は「よき人に出会って」と、まあ「よき人」たち「との」と言いたいところです。私はたくさん「よき人」に出会いました。今、学長先生が言われましたとおりです。学長先生の言葉を、みなさん、どう聞かれたですか。私は今のお話を聞いて、大事なことを言われているなあと思いました。

私は思うのですけど、私たちの身は、今ここにしかないんですよ。その、今ここにいる自分となって、話を聞いたり、友だちと話をしたり、スポーツをしたりする時は、自分が自分になってしていったら、(当事者となっていったら)気持ちいいでしょうね。どうぞ今、この時を大切にね。

私はこの「よき人」に出会って、今言えることは、私の出会った先生たちは同じ一つの

よき人に出会って

ことを私に教えてくれたのだなあと改めて思うんです。それは、「本当のことを大事にしていける人間になりましょう」と。それだけなんです。

親鸞聖人は「本当」ということを「真実」と書いてね、

### 「真実は阿弥陀如来の御こころなり」<sup>①</sup>

そういう言葉がありますけど、私はたくさん先生の先生たちに出会って何を学んだかと言いますと、本当のことを大事にしていける人になってください、と。そういう願いをもつて、私に関わって来られていたんだなあと今は思えるんです。

私は今六十五歳と、五歳の身と両方あるんですけど、その自分に何を願われてきたのかというと、そのことだけだったなあと憶うんです。だからまたそういう意味で、自分一個人の人間のとこで、みなさんに伝えたいことは、どうぞ、本当のことを大事にしていける人になってください、と。そのことだけを言いたいと思ってやって来たようなことです。

## どんな人にも貫き流れている願い

今、みなさんは青春のど真ん中ですね。その「青春」という日本語について私の学校の信国淳という先生は「外国にはヤングとオールドしかない」と。でも日本語にはこうして生きるいのちに、日本語は幼年、少年、青年、中年、壮年、老年と、いのちを豊かに表現している、という言葉に出会いました。そういう意味で言えば、みなさんはまさに今青春のど真ん中。いのちの青い春です。そのいのちを、文字どおり青春のいのちとして生きてますか？と、当時の学生さんに問われました。先生は、獅子吼といいますが、身体全体で呼びかけ、問われました。七十四歳の時になくなっておられますが、その一年くらい前のときに、私たちお坊さんになろうとする十八歳から上の数十名の学生さんに向かって、「青春を青春として生きとるんですか！」と厳しく呼びかけられました。七十四歳の方が、「みんな、青春を青春として生きてこそ！」と。

そういう話を私はみなさんの顔を見ると思いだすんですよ。前に二回お邪魔したときは、入口の運動場でテニスをやっておられた、みなさんが一生懸命テニスやっている姿を

よき人に会って

ね。私も野球をやってきましたから、同じスポーツで興味もあってしばらく眺めて、ああ青春をしてるなあと見てましたけど。でも、この信国先生の言葉のように、今本当に、この今を生きていながら、青春として、青年として生きてながら、みなさんの存在が「いのちの青々とした芽吹き」の青春を生きていますか」と、その七十四歳の先生から問われた時に、どう思われますかね。私はものすごく胸が高鳴ったんです。

### 「君たち、十二年間生きて、これだけか」

それでね、こういう話があったんです。十年ぐらい前になりますかね、佐々木——ちょっと下の名前を忘れましたが——私と同年の方で詩人なんです、その佐々木さんがNHKの『いきいき授業』というので、自分の母校へ行きまして、六年生の子に向かって、わずかに二、三時間で授業をするんです。私は時々それを見るのを楽しみにしてつてですね、アニマル浜口さんやら長瀬剛さんやらが授業に出てきて、面白いなあと見とった。

その中で、その佐々木さんが来た時が一番心に残った。佐々木さんは詩人です。六十いくつまでの今も詩人として生きてこられた。詩人というのは言葉をいのちとして生きてい

る方です。言葉というのはその一言で、佐々木さんもおっしゃってたけど、いのちを甦らせもすれば腐らせもする。こちらの受け手によっても違いますけどね。その六年生の授業には胸をうたれました。佐々木さんが教室に入ってきて、まず六年生の子どもたちに「自分で詩を書いてきてほしい」と言って詩を書いてきてもらった時の授業がですね、びつくりしました。初めの言葉はこんな言葉だったかと思います。佐々木さんの真似をしてちょっと言いますとね。「みんなの詩を読ませてもらった。君たち、十二年間生きてきてこれだけか」と。私は『いきいき授業』が好きですから見てますけど、そんな授業は初めてでした。のっけに叱っていました。テレビを見ているこちらの私にも緊張が走りました。叱ったんです。女の子も男の子も叱られました。「君たち十二年間生きてきてこれだけか」と。

詩を、言葉をいのちにしてきた人から見れば、六年生とはいえ、十二年間生きてきたではないかと。その生きてきた人としての証として言葉を読みたかったんでしょか。そしてその読んだ子どもの詩にそうじゃなかったものを見たんでしょか、自分の魂に呼びかけるように先生は怒らはったんです。それに対して子どもたちの反応が素晴らしかった。斜め横に腰掛けて、ちよっとたるそうにしまった子たちがね、——普通叱られるとい

よき人に出会って

じけるのが多いんだけどね。私もそうです、すごいじける——だけどその子たちは目が光った、腰が立った。これは奇蹟が起きたんですね。みなさんはそういうことがありますか。

私はすごくその子どもたちに感動しました。何故かというと、叱られて目を覚ますようなことはほとんどないです。むしろうつとうしいと思うんです。反抗心とか反感がでるんです。たとえば、話をちゃんと聞かずにあって、ちゃんと聞きなさいって言ったら大人でも大学の学生さんでも、素直に聞けないんですね。ある大学で、式の最中におしゃべりをしていて、それを先生方が注意をしたら、「勝手に話してください。私たちは勝手にしておりますから」と、注意を無視してしゃべっていたという文を見まして、すごくショックでした。本当にもったいないと思ったんです。

でも、その子どもたちは注意されて逆に腰骨が立った。立つと目力がついて、授業に集中して、佐々木さんが、「今日もう一回うちへ帰って詩を書いてきて下さい」と頼んでその日の授業が終わった。そして、最後の授業のときに、佐々木さんは子どもたちが書いてきてくれた詩を読んでね、クラスの教室の前に立つての一言にまた胸をうたれたんです。それがね。「ありがとう」だった。叱った詩人の佐々木さんが子どもたちに「ありがとう」

と頭を下げて、教室を去って、廊下を去っていきながら、ずっと泣きながら歩いとった。六十歳前後のおじさんがね。なりふりかまわず泣いて歩いていかれた。私もそれを見ながら泣いていました。「うん、うん」と言いつつね。

子どもたちがたった一回の先生の授業で、「君たち十二年間生きてきてこれだけか」という一言で、自分の生き方、学び方の姿勢をコロッと変えた。そして佐々木さんの魂への呼びかけに応えた。応えたら腰骨が立って、自分の言葉でもう一度詩を書いた。それが佐々木さんの、長い自分の人生を詩人として生き貫こうとするその一生にまた光を投げかけて、子どもたちに一言「ありがとう」と。つまり、どんな生き方をしていても、ひとたび魂への息吹をぴゅっぴゅっと振りかけられるとね、どんな人でも本当に自分の大事なものを大事にしていきたいと。生きとる身は一人ひとりちがつても、人としての大事な何かが共感していくんでしょか。佐々木おじさんと子どもたちとの共鳴ですね。みなさんもよかったらあの授業をテレビで放映してもらったら一度見られたらいいなあと思います。

人間というのは、自分の頭で考えて、経験で考えて、知識で考えて、自分はこんなもんだとか、社会から人間はこんなもんですよ、とはめられたようなもんでできとるんじゃないな



よき人に出会って

いんですよ。本当の人に出会うとね、本当の人間というのは、青春を青春として生きさせる命の深みを知っていらっしゃる。私はそういう人たちにうんと出会った。これは何よりの人生のプレゼントです。叱られて嬉しい、そんな世界があるんですよ。言われて初めてはっと気づく、「ああ、私忘れてた。自分の大事なところを」。そういうことがあるんです。

宗教と言う言葉について、次のように教えてもらいました。宗教の「宗」という字は、存覚上人という親鸞聖人の後で出てこられた方が、宗教の「宗」は「要」だと。それをあの先生が宗教の「宗」は「要」だと。「要」とは扇子のボツだと。最後の一点で扇子が開くボツ。あのボツ、一点が「要」だと、「宗」だと。つまり扇子もあの元になるボツがなかったら扇子としての機能は働かない。人生という扇子が一貫していくのはそのボツがあるからだ。その人生の一番のボツ（宗・要）だと。これから生き、生きんとするみなさんが、本当に辛い時、悲しい時、いろんな人生の苦難があった時に、どんな苦難があっても、それをしっかり受け止めて、そこから考え、そこから光（希望・願い）を持って生きると、そういう確かな根拠を持った、確かなものをみなさんが大事に願って探していくなら、必ず「ああ、これが私の人生の本当の拠り所だったなあ」というものに目覚めると思っています。今は若さとか、そういうものが自分の可能性としてありますけれども、それだけ

では人生じゃないですね。いろんな人生を経る、私たちみたいに、年をとっていくことにもなりますから、その人生を一貫する大きな確かなものを、ぜひ、見る。見届ける眼を、こういうゆつくりとした、学生という時間をもらう時に、どうしても一点見据えておくというのが私は大事だなと思っています。

### 確かな人（よき人）に就いて学ぶ

私たちが、そのいのちの青春を生きながら、青春を青春として生きさせないものが、一つあるという大きな問題があるというんですよ。私もそのことをちょうど十八歳の時に、大学は国立しか希望できなくて、——貧乏でしてね。数学が得意で国立系を受けたんですけど、二つとも、——先生は受かると言ってくれたけど——落ちましてね。落ちて社会人になりました。その時、自分が落ちたことを素直に認めることができなくて悩みました。その悩んだ時に——私は十八歳の時に、ある意味で、本当に人生を見通すような深い智慧を持った先生に出会って——悩んでおった中でそういう先生に出会った。ある本を読んでいたら、その先生が素敵な言葉を書いておられた。読んで助かりました。それはこんなふ

よき人に出会って

うに書いてありました。(これは森田正馬と言って当時、慈恵医科大学の精神科の先生で、親鸞聖人を勉強なさっている方でした。私のお会った先生は、尋ねていくとみんな親鸞聖人の勉強をしておられたんですね。驚くべきことでした。どんなに時が変わっても私の出会った先生は、みな学びを親鸞聖人の方に向かって行かれているんですね。まあ、是非みんなもわかつてもらわなくても、親鸞聖人を大事にしていけるといいですね。それを読んで思ったことは、若い時に、身体も心も柔らかい時に、しっかりと確かなものに触れていくと心が澄んでくる、立ってくる。そして自分も他者も大事に生きることが始まる。そういう、人生の基盤みたいなものを養い育ててもらえる。そうすると誰とも通じ合っていくことが人生の最も大切なことだと見据えていける眼を培っていける。これがよき人との出会いで感じたことです。)

自分の心の事実をありのままに認め、ありのままに白状するだけです。私は倫理学者ではありません。私はただ事実を正しく観察し、研究する科学者でありたいと念じているものです。(略) 人がそれぞれ自分の心の事実をありのままに認めることができるようになるのを「自覚」といい、自分の心の奥の奥まで見とおしがつくのを「正覚」といい、それが、「佛」になる前提であります。

親鸞上人は、「自分は悪人であり、罪の深い者である。したがって人を裁く力はない」と言われましたが、それが親鸞上人の「正覚」であります。<sup>②</sup>

この言葉は今も時々読み返す大事な言葉です。

### 自分の心の事実をすなおに認めていく

私は十八歳の時には、心はいつも倫理系でした。この言葉に出会って、大学を落ちてから困った時に、「自分の心の事実をすなおに認めて生きなさい」。これを聞いた時に「ああ、これで生きられる」と思ったんです。つまり、自分の心をすなおに認めてもらいと。これが私が十八歳の時に出会った言葉で、それが紆余曲折を経て坊さんになっていくものになるんですね。農家の七人兄弟の六番目の息子が、社会人、学校の先生を経て坊さんになって、今、みなさんの前に立っています。この言葉が私は自分を少しすなおに生き始めるものになった言葉なんです。「自分の心の事実をありのままに認める」って容易でないですね。人のことはまあ良く分かるときもある。だって目は外に向いてるから。でも自分の心を見るってことは並大抵じゃない。だけど私は、この森田先生が、自分がお

よき人に出会って

医者さんであるにも関わらず、患者さんの前で、自分は臆病だとか、忘れっぽいとか、次々と自分の心の事実を言われるんですね。患者さんも先生と同じ心を持っているんですけど、それで悩んでいるんですが、同じことを言うんですよ。私はそれに驚きましてね。

ただ、その心の事実の受け止め方が全く違うんですね。たとえば、私は臆病だ、だからいざというとき、捨て身の勇気が出てくるのだとか、私も忘れっぽい、だから忘れない工夫をするのだとか、私は背がこれだけのものだ、だからその事実に立って私は生きるだけだとか。まあ、見事なほどに自分の事実をきちんきちんと言っておられる。自分の事実を受け止めて、大事にしていける。私たちはそういう事実があっても言えないし、受け止められない。ついつい嘘をついてしまう。それが心の事実です。そのことでも森田先生の言葉に、「人間は嘘をつく動物である」<sup>(3)</sup>と書いてあります。そう言われた時に私も山ほどの嘘をついていますから、嘘をつくということを認めていくんですよ。そうだなあと。辛いくけどね。そうすると、嘘の中身は言えないけど、嘘をつく自分だと認めていくと、なぜか心に余裕が入ってくる。嘘から逃げないでそういう自分を認めていくと、たとえば、悪口みたいに、あんた嘘つきって言われると一瞬カーッとなりますけど、よく考えたら、なにかにつけて嘘をついてる自分だとだんだん自分が分かってくると、「うーん、うーん」

と、だんだん嘘の持つ問題性が見えてくる。そうすると、嘘の悲しさ、嘘の恐ろしさが見えてきて、いよいよ嘘という言葉を大事にするようになる。嘘を言うことがどんなにお互いの関係性を傷つけているかということがみえてくる。そうして、人間的に成長していくようです。私はそういうことを十八歳の時に森田先生の言葉に出会って、良かったなあといふまでは思っているんです。

## K先生

私は二十八歳の時に小学校の先生になりましたけど、小学校の先生になる時も、――私は通信教育大学で免許を取ったんです。一応、資格としては、先生としては一人前です、免許を取っているからね。運転免許と同じですね。免許を取ったら一人で運転できます。ところが私は、当時四人ほどこいる通信教育生の中で、私を応援してくれた、教頭先生をしてもらった人ですが、私はその先生に申し訳ないことをしたんですけど、その人も親鸞聖人を勉強しておられました。

私が〇〇県教育委員会へ行って、産休の先生の代わりに先生をやりたいのでお願いし

よき人に出会って

ますと申し出たら「ああ、〇〇先生の紹介ですか」と言われ、丁寧に手続きをしてくださいました。赴任先がすぐ決まったんです。赴任して何年目かの時に、私は、学校を辞めて京都のお寺さんの坊さんのところで生活を共にする形で親鸞聖人を勉強したいと思っていたものですから、学校を辞めることにしました。その最後の年の担任がちょうど五年生でした。

その時に私は、最後でもあったのでこの子たちが自分のことをどう思っているか聞いてみたくて、次のような提案をしました。「明日は君たちに先生の裁判をしてもらおうか」と言いました。五年生になると批判力もありますからね。子どもたちはしっかりと考えました。自分というものを持っている子でしたが——その子はもう今はなくなりましたけど、三十歳いくつでね——その子が裁判長をやってくれました。男の子はほとんど僕のことを「無罪」と言っていました。よく遊んだし宿題のない学級でしたから。お母さんたちには怒られましたけど、楽しかったです。それで、女性のほうは何人かが「中立」で、後のほとんどは僕のことを「有罪」と言いました。有罪と言った子の中には、学級委員の子もありました。「何でか」と裁判長が聞いたたら、「先生は、してはいけないことをやる。これは許せない」と。五年生になるとすごいですね。「それは何ですか」と裁判長が聞いて

たら、「先生として一番やってはいけないことを先生はやるから有罪だ」と。先生ならこれはやってはいけないことをやるんだと。「なんだ？」と聞いたら、「鼯鼠（ひいき）をする」と。先生はみんなに平等に対しいけないのに、愛吉先生は鼯鼠をする。これは先生として許せない。だから有罪だと。その時に私は、〇〇くんという裁判長から「先生はどう思う？」と問われました。

私は森田先生に「心の事実をちゃんと見ていきなさい。それが人間の第一のステップだよ」と言われておったのを大事にしましたから、先生の言われるように事実に従おうと思いました。

また、K先生から「先生というのは、教師の免許を持つてただけでは先生になれないよ。先生というのは子どもたちの魂の世話をするんだ。十二歳とか十歳とか、（一年生が多かったから）六歳からの魂の世話をするのに、ただ免許だけではできないよ。生きた人間の、小さな子どもの柔らかい魂を世話するのに、君、いくつかのことをやっていきなさい」と言われました。それが私にとっては自分を見るチャンスになりました。確かな先生の確かな言葉は自分のありようを知らされることになりましたね。先生から知らされたことは一つは、「黒板を大事にしなさい」と言われました。黒板は自分で拭きなさい。鏡のよ



よき人に会って

うにしときなさい、と。なぜか。黒板は「子どもたちが朝から晩まで見るものです。その黒板を大事にしないとね」、と言われました。そんなことは先生になるための教科書に載っていませんでした。それから、「黒板に書く字を、たとえば新聞の自分の気に入った文章をいくつか見て、良いと思われる文章を、黒板に楷書で丁寧に三十分くらい書いて練習して、字が少しでも上手く書けるようになって、先生になっていってください」と言われました。もう一つが、これが自分を知る決定的なことでした。「教室を出る時に、一人ひとりの子どもの机を整理整頓した後、拭いてから教室を出ていきなさい」と言われました。

通信教育の大学の四年間で一三二単位取った中で、そんなことはどこにも載ってなかった。長年、本当に子どもを大事にしてきた先生からの教育の原点。その頃は目も悪くなされていたのですが、でも、そんな中で私はK先生からその言葉をもらってね。

忘れることもありましたが、先生の教えをコツコツ行なってきました。半年以上、もつとですかね。それが自分にとって自分を知る為にとっても良かった。初めて私は「先生」という冠をかぶって、教育の現場に立ったのです。知識もある程度学んで、物事もほんの少し分かった気分でおって、その高みから逆に、子どもたちは何も知らないから、と思

つてたかをくくる、大変奢り高ぶった自分が知らされてきましてね。でも子どもたちは「いのち」においては全くびんびんと柔らかな感性で生きていて、そこで物事を見ておるんですよ。

私は子どもたちが「鼯鼠する」と言った時に、はたと身に覚えがあることがあった。それは、机を一つひとつ拭いていったことから見えてきた自分なんですよ。これをやってシヨックだった。自分自身がね。裁判になる前から見えていたのです。ある子の机を拭くと、「ああ、この子とはしゃべってないなあ」と、「ああ、この子のことを嫌がっているなあ」と意識している自分が見えるんです。それで、遠くに置いておるんです、心が。またある子の机の前に行くと、「この子とはよくしゃべったなあ、朝から……」ああ、気に入っているんだと。

そうして机を拭くとね、どの子も自分の学級の子どもでかけがえのない大事な子どもなのに、実際に関わってる私は一人ひとりの子の机を拭くことによって自分の関わる心が平等でないことが見えてきた。鼯鼠している自分が見えてきた。だから、その時に女の子たちに「先生は一番いけないことをやっている、鼯鼠する」と言われた時、裁判長が「認めるか？」と言った時に、私はその事実を「はい」と認めるほかなかった。格好悪いけど

よき人に出会って

ね。情けないけど、申し訳ないけど、それが自分の事実だったんです。

そしたら裁判長が「僕、弁護人になる」って降りてきて、弁護人をやってくれました。それでみんなに「この中で、友だち付き合いをしている輩をしない子がおったら手を挙げろ」って言うんですよ。「僕たちも五年生になって友だちが変わったけど、好きな子、嫌いな子、いっぱいおるじゃないか。朝から晩まで輩しとるじゃないか。それを先生が輩しとるって、先生を責めるのは問題だ」って言うんですよ。私は助かったあと思ってた。いいことを言うてくれるなあと内心思ってたね。そしたら、夜中まで頑張ってた。これた子が手を挙げて、「今の質問に応えます」って言うんです。「私たちは子どもです。これから大人になるんです。だから今は輩していてもいいんです。でも先生は先生でしょ。先生が輩したらダメです」と厳しく反論されて、最後、私は「有罪」になって、給食の当番をずっとやったり掃除をやったりして許してもらいました。

それが私の教育に携わったところから見えてきた自分の心の事実なんです。それが京都へ行きまして、親鸞聖人の教えを聞いていると、あらためて、私たちの心というのはどこをとってもみんなに平等に関われる心はなかなかないんですよ、と聞かされてね。誰とも平等に大事に関わりたいたいという気持ちが強くなってきても、いざとなったら悲しいほどに

自分の好き、不喜欢、臆する心が出ちゃうと教えてもらいました。そういうこともていねいに、実際に共同生活の中で生きることを読んで、私はまたもうひとつ自分の心に目がいくようになったんです。

## 竹中先生

私の京都での先生がこんなことを書いておられます。みなさんこれがどう聞こえますかね。

我々はいつの頃からか、「こういう自分は嫌だ、受け容れられないとか、ああいう自分は嫌だ、受け容れられない」と、自分自身を嫌悪し、人を嫌悪して、それが自分自身であっても、縁の深い人であっても、そのまま受け入れて生きることがはじめられない。そのため、我々は自閉して闇の中で、生ける屍となっていく。

問題は、我々の自己中心的によしあしと分別する自我意識にある。そのことがいのちそのものを殺傷し、屍化している。しかし、そのことが逆に、いのちそのものを悲し

ませることにもなっている。<sup>(4)</sup>

よき人に会って

そういう文章に出会いました。私たちは自分の事実をそのまま素直に受け入れられない。悪いことになると、ついいいわけをしたりします。みなさんもそうでしょ。友だちから、例えば「今、話したらダメだよ」と注意されたらムキになるでしょ。注意してくれても、それがどんなに当たって悪いことだと思っても、相手がせっかく意見をしてくれても自分の都合で消そうとします。そうやって自分を自分で守ろうとします。壁を作ります。<sup>(5)</sup>でもその時に、(ああ、そうだ。私はこの話を聞かなきゃいけないものとしておったんだ)と思ったら、それを注意してくれたことに「ありがとう」と、注意してくれた人との心が通じていくわけですけども、そうならなくて、言葉が通じない世界になっていつちゃう。それは、私たちの心が、善いものは受け入れて、悪いものは嫌だと排除していく、その心が自分の事実<sup>(6)</sup>に素直に生きることを邪魔しているんですよ、と教えられました。それと同じで、今青春という時を生きながら青春を青春として生きさせないのは、私たちの劣等感(コンプレックス)とか、優越感とかに一喜一憂する心が、自分の現実<sup>(7)</sup>に素直に立つことができないんだよと教えてもらいました。こういう自分じゃダメだと——他人か

らじゃなくて、自分の内からでも「こういう自分はいいけど、こういう自分はダメだ」と蓋をしちゃうんです。それが、私たちの青春を青春として生きさせないものなんだと。

そういうことを私は京都で、仏様の教えを聞いた先生から教えていただいた。これは教えなんです。私たちはまるつきり自分のこころの問題を知らないんですね。多くはそんなことに関係なく生きてる。落ち込んだり、卑屈になったり、いじけたり、忙しい。そして上手くいくと有頂天になって、力んでみたり、人をバカにしたり、忙しい。そういう自分の思いをていねいに見ていくと、先生の言うとおり自分の思いが自分を傷つけたり、他人を傷つけているなあと、ふと分かるんです。その時に、「ああ、自分は本当はこういう自分だったなあ」と、事実の自分に立ち返っていくように、一つ新しい生き方が始まる。それが青春を青春として生きるものになっていくんですよ。

今はなかなかそういう事実の自分を知らされていくような教えを聞く機会がないものですから、どうしても思いの自分を自分として、バーチャル化していることすら見えなくなっていると言われています。本当に悲しいことなんですけどね。私はたまたま親鸞聖人の教えを学んでいる方にふれて、自分というものは実は見えない、見えにくいものだよと。だから本当の先生を持たないとね。本当に叱ってくれたり、心から声をかけてくれる友だ

よき人に出会って

ちを持たないと自分の人生を見誤るよと。また人のことも見誤るよと。そういうことをていねいに教えてもらったんです。だからみなさんも、いろんな友だち関係や人間関係の中で、心と心が通じ合うような関係を、ぜひ、深く持つて行ってほしい。そのためには、自分も相手も何を心から願っているかということを、しっかり学んで行って欲しいなあと思っています。

### ほんとうの願い——浄土の願い<sup>(6)</sup>——

私は京都の学校へ来まして、浄土真宗の阿弥陀如来が莊嚴してくださる浄土というのは、人と人が通じ合いたいと願ってるものですよ、と。顔も違う、心も違う、経験も違う、考え方も違うけれども、命は同じ一つの阿弥陀の命を生きたるもんですよ、と教え続けられましたね。二十五年間、繰り返し巻き返し先生に教えられました。

学院の共同生活ではついついぶつかったりします。一緒に生活していると段々慣れ合っていきます。するとうるさいとか、あんななんかに言われたくないわとか、そうやってお互いに指摘された自分を、それが自分が問題だとわかっててもその自分を認めなくてね、本

当は注意してくれた方がその人を愛しとるんだけど、された方は自分の自我が立つと、カーッとなって、それまでの関係やその場が無茶苦茶になっちゃいます。それこそ自分で自分を傷つけ、また人を傷つけて、それで何もその傷つけていることに気が付かないかのような生活になっちゃうんです、私のような、ね。

せっかく学校の先生になったのに、子どもたちにちゃんと、どの子にも大事に関われない自分の姿を見て、「ああ、これが自分の心だったな」と、子どもに謝っていったんですけど——その心は今も生きて働いているんですが——そういう心だということすらも気が付かないで、相手の方に責任をなすりつけてしまうような心が、私たちにはいっぱい湧いてくるんです。その時に親鸞聖人は、仏様を憶う中で自分の心を見てごらんなさいと。そうすると自分の心の事実が素直に見えてくるんですよ。

そういうふうに、私はたくさんの先生たちから、学校では竹中先生、それから教育の現場ではK先生、十代の時には森田先生と、人が生きるについてなくてはならぬ大事なことを教えてもらいました。

そういう繋がりの中で、関わりの中で、私たちは生きていますけども、その中身を、こういう宗教の時間に——ふだんは運動もしたり、勉強もしたり、家族や友だちの中



よき人に出会って

で生きるんですけど、果たしてその関係が、本当にお互いをいきいきと、みなさんなら青春を青春として、お互いを大事にしてる生き方だろうか、そういうことを点検する時間としてもてたらいいなあと思います。

私たちは自分では分かってないですけど、仏様に会った人から見れば

私たちにとっていちばん悲惨なことは、生活を共にしていながら、その人と真実に出会うことができないことです。そのような私たちのためにこそ人と人が真実に出逢うことのできる世界として、如来は浄土を莊嚴されるのです。<sup>⑦</sup>

とこれが私たちの一番大切なことなんですよ、と教えられたんですよ。みなさんどうですか。私はこの竹中先生のこの「私たちにとって一番悲惨なことは、生活を共にしていながら、その人と真実に出会うことができないことです」という言葉にいつも心を向けさせられます。なぜかという、みなさんもそうでしょうが、少し生きてきて人間関係というところで苦労しますと、一番の苦しみとか悲しみは、物ができるとかできないとかじゃなくて、心と心を通じ合わないことなんです。これが一番辛く切ないことなんです。そこを

受け止めて乗り越えていける教えが親鸞聖人の教えなんです、と言われるんです。

つまり、どうして通じ合えないのかというと、通じ合わせない心が、私たちのこの普段の日頃の心が、その因だと言われるんです。間に合うことは良いこと、間に合わないのは悪いこと、出来ることは良いこと、出来ないことは悪いことというふうに、分けちゃうもんですから、それで心が引き裂かれていく。その仏様からみれば心が病んでいるんです、と教えられました。そのことを教えに出会った人は——親鸞聖人も阿弥陀さまの教えに出会って——もともと誰もみな深い繋がりの中で生きているんですよ、そういうことを先生たちからいてねいに教えてもらったわけです。

## 学ぼう

今日はみなさんと一緒に読みたい詩がありました、その詩を読んでみたいんです。私たちは初めからできた人間じゃなくて、学んでいくという大きな宿題があり、それは喜びになっていくんですよ。ぜひ、学びを大事にしていってください。私は京都のお坊さんの学校で学ぶことについて、こんな言葉を教えてもらいました。

よき人に出会って

なぜ山に登るか?と問う人に、アルピニストは答えている——「山がそこにあるからだ。」「なぜ学ぶか?」という問いに対する私たちの答えもまた、同じように単純である。

「人として、ここに置かれているからだ。事実存在する隠れた真理が刻々に私を呼ぶからだ。」<sup>(8)</sup>

学ぶ心は大きいですよ。広いですよ。知らないことは何も問題じゃない。どこでも、社会へ出ても、家にいても学んでいくことができたなら私はいいなと思います。みなさんは今、ここに来られてるんですから、先生方に出会って、体当たりして、友だちに出会って、心を尽くして深く生きていつて欲しいなと思います。

### 持続する学び心

これは昭和十一年にお生まれになった菅野国夫さんという、高校の倫理社会の先生になられて、二十七、八歳の頃に書かれて、その後結婚されて子どもさんが一人生まれて、亡

くなっていかれたんです。独身の時の最後の時に書かれた文章で、私たちが学ぶ、本を読むということはどういうことかということを学ぶ意味で、みなさんと確かめたくて用意しました。読んでみます。

\*\*\*\*\*

## 姉の書

高校生の姉は美しかった

死が割引したからではない

本当に美しかった

いつも読書ばかりしていて

学校の勉強はあまりしなかった

「岩波文庫」というやつを知ったのも

まったく姉のおかげだ

姉は数限りない文庫をもっていた

よき人に出会って

そしてあたりしだいにそれを読んでいた

野山や海や河にばかり遊んで歩いたわたしはいつも勉強をするように注意をうけた  
それでもわたしはこっそり遊んで日が短くて短くてしかたがなかった

自然の獲物がわたしに向かってくるものだから

どきどきしながらおさえた

ふな どじょう 蟬 はまぐり……

ああ数限りない

姉は注意して笑っていた

「くにお君ね、勉強もしなさいよ」といつもやさしく言った

僕はそのたびに頭をかいてうなずいた

ある日姉に友達が来た

釣から帰ってきたら

女のゲタがきちんとそろえてあった

台所のガラスごしに静かな女の声がした

客に無頓着なわたしは

水槽にふなをはなして

すぐ山へでかけようとした

きちんとしたゲタのところまで来たとき

姉に呼びとめられた

「くにお君お入り」

どろんこ足をそのまま上って姉の友達におじぎをした

ゲタのようにきちんとした女の人だった

姉のわきに座らせられてお菓子をもらった

手がとつても魚くさかった

姉はわざと僕の手をおさえて

においをかいでみせた

僕はすぐ行こうとしたら

ちよつと待ってといって

ちり紙にお菓子を包んでくれた

よき人に会って

そのとき僕と向き合ったテーブルの上に小さな書物があった  
「歎異抄」と書いてあった

字が僕と姉の友達の方を向いていたから

姉の書物だということがわかった

なんの書物かわからなかった

でも妙にそのうすっぺらな書物が

僕の頭にひっかかって離れなかった

山への途中も家に来ても

どんな漫画も小説も

ほとんど書物を読んだことのないわたしは

学校の帰りに

姉のいきつけの書物屋に立ちよって

こういう題目の書物をくれと言ったら

タンイシヨウかと番頭が言った

そうとう高いんだろうと思って

三百円でしたら

四十円だと言った

まん中に紺の瓢箪が書かれた紙で

表紙をくるんでくれた

家でリングをたべながら

めくったところが十頁

本願を信じ(信)

念仏をまうさば(行)

仏になる(證)

そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきやと書いてあった

「なにの学問かは往生の要なるべきや」

そのところが氣にいった

勉強しなくてもいい口実みたいにすーっとした

ちんぷんかんぷん後のところはわからなかった

中学校に入って



よき人に会って

先生が勉強しろ勉強しろと言うから

本願を信じ

念仏をまうさば

仏になる

そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきやと言ったら

馬鹿野郎！とどやされた

どうもけち臭いさけびだなあとと思った

その後

わたしのタンイシヨウは一年と二ヶ月ほこりをかぶって「代数初歩」の上でねむって  
しまった

姉は東京の大学へ行くというので

もっていく書物の整理をしていた

そのうち僕のところへなにげなしにやって来て

「封筒あったら一枚ちょうだい」といった

「代数初步」の上のものを見すぐす筈はない

「タンニシヨウを読んでんの」

僕はそうだとそうでないともいいかねた

母からこっそり拝借しておいた封筒を全部わたした

なんだかタンニシヨウではないタンニシヨウをあげたくなってきた

「僕にはまだ早いからいらない」といったら

首をふりながら

「ううんわからなくても後になってたえず読んでおってわかったのとそのときはじめて読んでわかったのではちがうのよ」と言われた

姉は何百編読んだか知れない

僕はいまだ五回しか読まない

わたしなりにわかったところもある

無限なもの（弥陀）がいろいろな関係を通じてその葉っぱにしたりわたしにしたりして、それぞれのはからいを済度したがってやきもきしている

よき人に会って

そのところまでがようくわかった

しかも生きているうちにこの現世で……

姉はそういつて大学へ行った

そして死んだ

「歎異抄」は日に読まれない日がなかったように

数冊の「歎異抄」がすりきれていた

そしてどのページにも

本願を信じ

念仏をまうさば

仏になる

というところに赤線が引いてあった

\*\*\*\*\*<sup>⑨</sup>

この文章をみなさんと読みたいなあと思ったのは、学ぶということは、じっくり、分か

っても分からなくても、ていねいに読んでると、またよく分かってる人に聞いていくと、今まで自分が分からなかったことが分かってくるとか、自分が学び続けていくと知らぬ間に自分が成長していくんですよとか、そういう学びがあるということを、この「姉の書」を書いた菅野国夫さんという方が——子どもさんが一歳くらいでなくなっていくんですけど——やっぱり人生っていうのは誰にとってもかけがえのないものですから、そのかけがえのない自分を本当に大事に自分を育てていくようにという深いメッセージがこもっているように思いましたから、読ませてもらいました。

### いのちのアンテナを掲げよう

あわせて、茨木のり子さんという人の詩を読ませてもらいます。これは最近なくなられた詩人です。この詩も、私たちがついつい忘れている世界を教えてくれていると思います。

\*\*\*\*\*

汲む

— Y・Yに—

茨木 のり子

大人になるというのは

すれっからしになるということだと

思い込んでいた少女の頃

立居振舞の美しい

発音の正確な

素敵な女の人と会いました

そのひとは私の背のびを見すかしたように

なにげない話に言いました

初々しさが大切なの

人に対しても世の中に対しても

人を人とも思わなくなったとき

墮落が始まるのね 堕ちてゆくのを

隠そうとしても 隠せなくなった人を何人も見ました

私はどきんとし

そして深く悟りました

大人になってもどぎまぎしたっていいんだな

ぎこちない挨拶 醜く赤くなる

失語症 なめらかでないしぐさ

子どもの悪態にさえ傷ついてしまう

頼りない生牡蠣のような感受性

それらを鍛える必要は少しもなかったのだな

年老いても咲きたての薔薇 柔らかく

外にむかってひらかれるのこそ難しい

あらゆる仕事

すべてのいい仕事の核には

震える弱いアンテナが隠されている きつと……

わたくしもかつてのあの人と同じぐらいの年になりました

たちかえり

今もときどきその意味を

ひっそり汲むことがあるのです

\*\*\*\*\*  
(10)

大事なゆつたりとした学生生活を、  
本当の人生の意味を深く汲み取るような生活をして  
ください。

よき人に出会って

最後に、私が聞いた浄土真宗の阿弥陀如来の浄土について、竹中先生から聞いた言葉をみなさんにお伝えして終わります。

浄土などといいますと、特別なことのように聞こえますが、「心は浄土に居す」ということは、「実語」にうなずくことのできたものは、生命あるものはすべて同じ一つの生命を生きているものだ、ということがはつきりとうなずけたということなんです。だれもがみなが同じ一つの生命を生きておるものだ、ということが一つ決定したんですね。だから生命をもっておるものはすべて平等で親しいものたちだ、と。それは一匹の蟻であろうと、一羽の鳩であろうと、一匹の蟻の生命と、一羽の鳩の生命と、一人の人間の生命は平等で同じ尊いものだ、ということなんです。ほんとうにかけがえのない重いものだ、ということです。そういうことにうなずけたのですね。そのことこそが心に浄土が開けた、ということなんです。<sup>(11)</sup>

浄土という言葉は今ほど遠くに感じるのかもしれませんが、私はその阿弥陀如来の浄土に触れて、その浄土を言葉にして教えてくださる先生に出会って、あらためて、人として、



よき人に会って

この世に生まれて生きて、この人生を生きるということは本当にありがたく尊いことだなあと思うんです。みなさん、どうぞ、大事な大事な人生、また友だちの人生、自分の人生、周囲の方の人生をね、本当に、大事に大事にしてください。  
これで終わります。ありがとうございました。

——二〇一二年一月二六日——

# 註

- (1) 東本願寺出版部『真宗聖典』「一念多念文意」五四五頁。
- (2) 白揚社『生の欲望』森田正馬・水谷啓二著
- (3) 同
- (4) 東本願寺出版部『同朋』月刊誌 竹中智秀先生の言葉より
- (5) この自我の膜のことを米沢英雄著『心の詩』(黎明書房)で

シャボン玉      ジャン・コクトー

堀内      大学訳

シャボン玉の中へは

庭はいれません

まわりをくるくる廻っています

を紹介しながら「シャボン玉の膜を自我という。うすぐ見えても、世にこれほど強靱なものはない。透きとおっているので自分自身には見えない。これが見えるか、破れるか、そこから私たちの精神生活、内面生活が発する。」とある。

- (6) 大聖寺教務所発行『大聖』(和田しげし「たすかるということ」より)  
「その本当の願いとは何でしょうか。」

「私たちはみな今まで経験してきた自分の世界の中で、これが人生だ、これが人間だと思いいこんで生きているのです。世渡りをしているのです。それでどれだけうまく世渡りをしていても本当のところ孤独で、むなしく物足りないのです。いのちの願いが満たされていないのです。その願いとは、人間はおろか地を這うものも空を飛ぶものも、いのちのちが共鳴しあい、通いあう世界を共にしたいという願いです。浄土の願いです。」

- (7) 真宗大谷派出版部『同朋』月刊誌「如来の遺弟悲泣せよ」竹中智秀より  
(8) 法蔵選書『哲学は何のためにあるのか』滝沢克己著より  
(9) 弥生書房『悲しみの光背』菅野国夫著より  
(10) 花神社『自分の感受性くらい』茨木のり子著より  
(11) 難波別院『仏事としての報恩講』竹中智秀著より